

参加と制度

—「なぜ島嶼部児童は体力があるのか」をめぐる理論的試論—

時津 啓*

Participation and Institution: Why is Island's Children a Higher Strength Than Ordinary?

Kei Tokitsu

This paper explores “Why is island’s children a higher strength than ordinary?” Importantly, the children are participating in club activities. Because of the increased opportunities for exercise, they seem to lead to better health. However, we have to consider “why do children in the island to participate in club activities?” This is a question of this paper.

We examined two cases. In the case of the athletic festival, a modern physical education is intended for the modernization (enforcement) of the body. However, athletic festival changed from the event which emphasis on competition/collective activity to the festival which people participant. Then, in the case of the bloomers, ie., sports wear for women, this costume was a symbol of female emancipation. But then, People had a positive / negative reaction to this costume. And, eventually, it sees as “a symbol of female oppression”.

This paper clarifies that participation and institution are complex intertwined and coordinated. We need to redefine the opportunity to exercise including all club activities by analyzing the relationship between participation and institution.

Key Words (キーワード)

Physical Competence (体力), Social Capital (社会関係資本), Athletic Festival (運動会), Woman’s Physical Education (女子体育), Island (島嶼部)

はじめに

体力の問い直しが始まっている。たとえば、多くの人が学校教育で経験したであろう体力測定を想起してほしい。現在では、この結果にしたがい、体力の低下—あるいは上昇—を唱えたとしても、その主張が字義通りに受容されることは稀であろう。もちろん、測定それ自体がアクチュアリティーを失ったわけではない。むしろ、そのデータを解釈する観点が変化したといえよう。具体的に言えば、近年健康指導の分野では、他者の体力数値と

の比較に基づく相対的評価よりも、個人の体力数値がどれだけ上昇したのかに重点をおく絶対的評価が重視されるようになった。個々人で異なる平均心拍数から導出される適度な運動強度への注目などはその典型だろう¹⁾。一定の種目を一定の尺度を用いて測定し、一定の基準で判断することはできないというわけである。

ここで注目すべきが、複数の観点から体力へ接近する方法である。具体的には、生活・運動習慣・運動意識と体力との相関関係を探究し、体力を複合的な観点で考察する方法である。事実、松尾晋

* 広島文化学園大学 社会情報学部
(Faculty of Social Information Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)

典らは上述のような方法を用いて、広島県の島嶼部児童の体力測定を行なっている。その中で、松尾らは三つのことを明らかにしている²⁾。第一に、体力テストに関して広島県全体としては全国平均を下回るのに対して、島嶼部の児童は、ほとんどの項目で全国平均を上回る。都道府県別の特色に回収されない島嶼部の特有性を見出すことができるというわけである。第二に、3年生頃から運動系クラブを始める児童が多く、それは体力測定の結果にも反映されている。第三に、低学年児童は、体力がないことへの自覚はないが、体を動かすことに対して、意欲的である。また高学年では体力があるにもかかわらず、意欲の減退が見られたというものである。

本稿が注目するのは、二点目である。松尾らは、体力の向上と運動系クラブの活動に相関関係を見出している。つまり、クラブ活動への参加が、体力の向上につながっている、と、事態は、シンプルのように思える。なぜなら、クラブ活動への参加は、運動する機会を提供しており、結果児童の体力は上昇するように思えるからである。しかしながら、そもそも、「なぜ児童はクラブ活動へ参加するのだろうか」。この問いを探究しない限り、島嶼部児童の体力問題は、運動機会が他の地域に比べて多いからであるという単純な言説へ回収されてしまうにちがいない。

本稿が注目するのは、松尾らのいうクラブ活動が、学校教育の教育課程に位置づけられたクラブ活動でもなければ、学校主体でなされている教育課程外の部活動でもない点である。このクラブ活動は、地域コミュニティーのなかで醸成された地域主体のクラブ活動である。端的にいえば、このクラブ活動が今日注目を集める社会関係資本(social capital)であるという点である。社会関係資本の概念については次節で詳細に検討するが、ここでいう社会関係資本とは、おおよそ次のように定義づけることができる。「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会的組織の特徴」である³⁾。

この点を考慮するならば、私たちは、島嶼部児童が他の地域に比べて体力がある根拠を、単に運動機会の多さに相応すると断定することはできないだろう。なぜなら、児童たちが参加するクラブ活動は、他者との関係を構築し、社会全体の一部として機能しているからである。つまり、問題は、松尾らの研究の手前にある。体力の低下／上昇は、運動機会の増減に左右される。「ではなぜ島嶼部の児童らは運動機会—つまりクラブ活動—へ参加するのか」。これである。体力が高いことの要因と看做されるクラブ活動は、運動する機会を提供するだけに収まらない複雑性を有する資本なのではないか。これが本稿の見通しといえよう。

本稿の目的は、「なぜ島嶼部の児童は体力があるのか」をクラブ活動—つまり制度—への参加の観点から理論的に考察することにある。

1. 社会関係資本をめぐる議論

まずは社会関係資本をめぐる議論を整理しよう。社会関係資本という言葉への注目を集める契機を作ったのは社会学者のブルデュー(Pierre Bourdieu)だろう。彼によれば、制度化された、相互に面識を持った者同士による関係から持続的なネットワークが構成される。これを通して結びついた現実的・潜在的な資源が、社会関係資本であるとされる⁴⁾。坂田の言葉を借りれば、ここでブルデューのいう社会関係資本とは、「個人が権力やリソース配分の決定権へのアクセスのために持っている家族・血縁関係や人的ネットワーク・コネクション」を指すとされる⁵⁾。つまりブルデューは、社会関係資本を、支配階級の権力や独占を支え、社会を分化、固定化するものと捉えるのである。

それに対して、コールマン(James S. Coleman)やパットナム(Robert D. Putnam)は、むしろ社会関係資本が、行為者の行動を促進し、人と人との関係性を構築すると主張する⁶⁾。とりわけ、パットナムは、社会関係資本を二分できる基準ではないとことわったうえで、社会関係資本の形態とし

て「結束 (bonding) 型」と「橋渡し (bridging) 型」を提示している。「結束型」の社会関係資本とは、内向きの指向をもち、排他的なアイデンティティーと等質な集団を強化していく。具体的には、民族ごとの友愛組織や教会を基礎にした女性読書会、カントリークラブなどである。他方で、「橋渡し型」の社会関係資本は、外向きの指向を持ち、社会的亀裂をまたいで包含するネットワークである。この型に属するのは、公民権運動、青年組織、世界教会主義の宗教組織が考えられている。パットナムは、後者の「橋渡し型」に注目し、社会関係資本によって結びつけられた市民の自発的な協力関係が、社会への積極的な参加を促し、ひいては民主主義を支えていると指摘するのである⁷⁾。そして、パットナムは、今日のアメリカではこのような自発的なネットワークに基づく人間同士の関係が希薄になっており、アメリカ人は互いに再び結びつき合う必要があると主張する。

コールマンやパットナムの主張をめぐっては多くの議論がなされている。たとえば、「市民社会のネットワーク」が「効率的な政府」を導くというロジックは必ずしも自明ではない。あるいは、「橋渡し型」社会関係資本にも、階層的な偏りがあり、結果的に社会的排除や不平等につながっているという批判などはその典型だろう⁸⁾。中でも本稿が注目するのが、スコッチボル (Theda Skocpol) の社会関係資本に関する見解である。

スコッチボルは、パットナムらが市民の組織化によって生じた変化を漸次的な世代交代のプロセスに求めることを批判する。このような求め方では変化の背後に作用していた制度的、社会的原因をほとんど明らかにしていないというのである⁹⁾。スコッチボルによれば、人々があらゆる組織へ参加したのは何も集団的な自発性に基づいてなされたわけではないという。むしろ、制度や組織が人々の参加する機会を提供しなければならない¹⁰⁾。このようにスコッチボルが明らかにしたのは、社会関係資本ができていくのには、制度を媒介する必要があったことである。人々は、自然的に社会関係資本を形成したわけではない。人々は、制度的

に社会関係資本を形成したのである。

このように考えるならば、私たちは、体力に関係する社会関係資本を形成した制度に目を向け、社会関係資本が形成された様相を明示すべきにちがいない。なぜなら、島嶼部の児童が参加するクラブ活動—社会関係資本—は制度的に形成された可能性があるからである。さらに、この構成性は児童のクラブ活動への参加へ何らの影響を及ぼしているのではないかと推測できるからである。

もちろん、アメリカを中心とした社会関係資本に関する議論を、わが国の限定された地域へそのまま適応することには慎重になるべきだろう。しかしながら、この文脈の違いは、社会関係資本という人々のネットワーク形成に制度が関与していたという視点が無効であることを意味しない。むしろ、逆に、本稿の立場—島嶼部児童の体力を制度への参加の観点から考察する—に限定すれば、わが国の文脈でスコッチボルの見解を検証する必要があるといえる。そこで本稿では二つの事例—運動会、女子体育—を考察の対象とし、わが国における体育に係る資本に制度がいかに関与したのかを検討する。

2. 事例の検討—運動会と女子体育

2-1 運動会

私たちがまず体育に関連する学校行事として想起するのは運動会だろう。吉見俊哉によれば、学校における運動会の源泉は、1874年 (明治7年) に東京築地の海軍兵学校で行なわれたとされる。外国人教師の指導の下で、150ヤード競争、走り高跳び、三段跳び、ボール投げなどの競技が実施されたという¹¹⁾。その後、この種の競技大会としての運動会は、札幌農学校、東京大学で開催された。

しかしながら、明治中期以降、運動会は、小学校や中学校へと浸透していく。ここでは、旗奪い、綱引き、徒手体操などが行なわれ、競技から兵式体操へとその中心を移している。吉見は、当時の運動会が、現在の「遠足」と同様に、学校を

離れお寺や川原で行なわれていたことに注目している。というのも、ここでは学校から目的地まで移動一行軍一、さらに旗奪いに代表される種目一、数軍に分かれ、敵軍の旗を奪い合う戦争ごっこ一がなされている。このことは、その目的が運動競技というよりも、軍事演習であったことを示している¹²⁾。

とりわけ、初代文部大臣である森有礼は身体の教育に早くから注目し、日本の近代化と個々人の身体の近代化を重ね合わせている。より具体的には、兵式体操を重視し¹³⁾、「従順ノ習慣」と「相助ノ情」「威儀」を養成できるとする¹⁴⁾。園田英弘は、この森の考えは、個人と国家の間に「制度」を媒介させ、両者を共存可能にしているとその論理構造を分析している¹⁵⁾。

その「制度」の典型が運動会であった。森は、運動会がとりわけ地方で重要であることを強調し、「又体操ハ時々三四里以内ノ諸学校ヨリ生徒ヲ集合シ、隊列運動及学校ト学校トノ競争遊技等活発ノ挙動ヲ為サシムルヲ可トス」と述べる¹⁶⁾。森にとって、運動会は、児童の身体を近代化する舞台だったのである。

その後、1900年代に入ると運動会は、再び競技としての色彩が濃くなる。徒競走や障害物競走が増え¹⁷⁾、運動会が誕生した当初へその内容は回帰したのである。しかしながら、吉見はこの時期の運動会が学校の外ではなく、内で行なわれていることに注目している。児童の運動は、運動場という閉鎖的な空間の中で行われるため、見ることができ、同時に測定可能なものへと変化したのである¹⁸⁾。吉見はこのことを「試験としての運動会」と呼ぶ¹⁹⁾。運動会は、児童たちへ順番に応じて賞品が配られるようになったことも相俟って、競争を土台にした学校的一すなわち制度的イベントになったのである。現在でもその原型をとどめる競争重視型の運動は、学校化の一端を担っているのである。

もちろん、このような流れは、森の思想を受け継ぐ者たちによって、批判されるようになる。たとえば、宇野沢太郎は次のように批判する²⁰⁾。競

争重視の運動会は、「優勝することのみに傾き易く、是れが結果、往々弱者をして立つ能はざるにいたる弊風」が生じるというのである。そのため、運動会の種目には、競争的なものではなく、団体共同的なものを比較的多く選択すべきとされるのである。

この見解は、徐々に次のように受容されるようになる。賞品の授与は簡素化される一方で、児童の運動会への参加を促すために、応援団を組織し、当事者間の競争というよりも、集団間の競争が推奨される。児童たちは、単なる個々のアスリートではなく、帰属集団の期待を背負い運動会へ参加するのである。このことは同時に、集団の構成員にとっても、自らの集団を背負い戦う限り、決して他人事ではなかったといえよう。山本信良らの言葉を借りれば、「運動会は本来が学校行事でありながら（中略）地域や『ムラ』の行事の性格を帯びたのである」²¹⁾。

このように運動会は、競技重視の運動会と集団重視の運動会のあいだで揺れ動いてきた。そして、最終的に両者は住民の参加を伴うイベントとして結実している。吉見はこの歴史を振り返り、次のようにまとめている²²⁾。明治国家は運動会を国家的な規律・訓練の枠組みに押し込めようとしたが、実際の運動会はその演出を逸脱してきた、と。より具体的には、教師や児童・生徒の数ををはるかにこえる観衆が晴れやかな衣装をまとい、宴を張りながら運動会を観戦したというのである。吉見はこのような状況を「祭礼化・見世物化」と呼ぶ²³⁾。日本における運動会は、人々をつなげる祭り（社会関係資本）としての役割をもっていたのである。

2-2. 女子体育

まずは図1を見てほしい。これは1964年の東京オリンピックの写真である²⁴⁾。ネットを挟んで奥が「東洋の魔女」と呼ばれた日本チーム、手前がポーランドチームである。掛水通子によれば、国民の多くは、テレビを通して日本チームとポーランドチームの違いを目にしたという²⁵⁾。具体的

には、ゆるめのブルマーとぴったりブルマーの違いである。

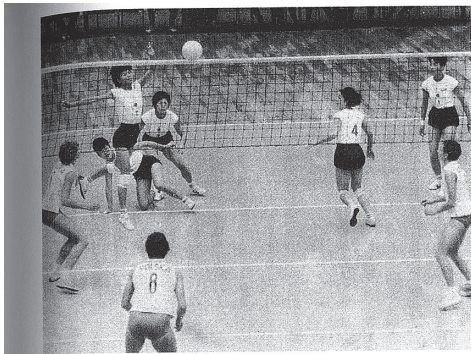


図1

そもそも、ブルマーとは体育を目的に作られた衣装ではない。後藤洋子によれば、その発祥は、1850年代のアメリカにまで遡る。発明者のブルマー夫人は次のように述べている²⁶⁾。

「私たちは、両性が全く同じ服装をするように提唱しているではありません。女性が男性と全く同じ格好をするのを見ることは悲しいに違いありません。でも私たちは婦人の服装において、根本的な改革が必要であると思っています。そうすれば、婦人は服装に対する隷属が彼女にもたらした、コルセットをつけ、無能にし、衰弱した生き物のかわりに、神がそうであるように造られた、自由で健康な存在になるでしょう」

この言葉からもわかるように、ブルマー夫人は、コルセットに代わる新たな衣装としてブルマーを提唱したのである²⁷⁾。その後、この衣装が日常の衣服として定着することはなかったが、1880年アメリカで女性の体操着として採用されることになる。わが国でこの衣装が注目されたのは、その後ということになる。谷口雅子によれば、アメリカに留学していた井口あくりがこの衣装を持ち帰ったとされる²⁸⁾。谷口は、井口がセーラー服、ブルマーの衣装に加え、スウェーデン体操を持ち込んだことに注目し、彼女の意図に「女性解放」

があったことを明らかにしている。ブルマー夫人の言葉にも含意されていると思われるこの意図は、わが国のブルマーの浸透を下支えすることになる。

掛水によれば、本節の冒頭で示した東京オリンピック以降、繊維技術の向上や生理用品の改良に伴って、欧米式のぴったりブルマーが定着していくことになる。このタイプのブルマーをめぐる、掛水は当時学校教育を受けていた人へインタビューを行なっている。その反応は、主に二つに分かれる²⁹⁾。第一は、肯定的な反応である。伸縮性があり、軽い。運動しやすいといった具合である。「ちょうちんブルマーでなくてよかった。とてもおしゃれになったと思った」³⁰⁾という反応まである。第二に、否定的な反応である。その多くは、足を出すこと、下着が出ること、体形がわかることなどに由来する恥ずかしさである。たとえば、「太ももが全部出てしまうことやおしりがはっきりわかってしまうことが恥ずかしかった」³¹⁾。とりわけ、第二の反応は、シャツを出してブルマーを隠す行為やジャージの重ね着という行動へと後々つながっていくことになる。

しかしながら、1990年代になると、ブルマーは、ブルセラ問題やセクシュアリティの象徴と看做されることになる。そして、ブルマーは学校現場から姿を消すことになる。再び谷口の言葉を借りれば、ここでは女性だけがブルマーを着用すること、下着に近い形であることが批判され、女性を「抑圧するもの」へと変化するのである³²⁾。つまり、ブルマーは「女性解放のシンボル」から「女性抑圧のシンボル」へと180度転回されるのである。

3. 導きの糸—広告分析とマスメディア研究

私たちの仮説はこうであった。社会関係資本（人々によるネットワーク）の形成には、制度が関与している。この視点は、わが国の文脈でも妥当性を有するのではないか。

その材料として二つの体育をめぐる事例を考察

してきた。運動会の事例では、本来、近代体育教育には、身体近代化—強制—の意図があった。しかしながら、競技重視／集団重視のあいだを揺れ動くうちに、運動会は、人々の参加を前提条件とする祭りへと転化したのである。さらに、ブルマーをめぐるのは、そもそもこの衣装は、女性解放のシンボルであった。しかしその後、この衣装は、肯定／否定的な反応を繰り返し、最終的には「女性抑圧のシンボル」へと転化する。私たちは、この二つの転化をいかに解釈すべきだろうか。

この解釈を求めて、導きの糸としたいのが上野千鶴子による西武パルコ広告の分析とイギリスのホール（Stuart Hall）のマスメディア研究である。上野の広告分析から見ていくことにしよう。

3-1 広告分析

まずは1975年に西武百貨店池袋店のリニューアルオープンを受けての広告（図2）を見てほしい³³⁾。



図2

上野の解釈はこうである³⁴⁾。まず子どもを抱く「パパ」の衣装に注目してほしい。ネクタイや背広ではなく、カジュアルウェアという概念自体がない当時に、この広告は「普段着のおしゃれ」を提示している。さらに、母親が「ガイジン」として描かれている。ここには、当時多くの人が抱くであろう「主婦」というイメージはない。「ぬかみそ臭さ」や「献身する母」はなく、あるのはファッションナブルな異化された母である。

上野は、この広告にあるのが、一歩先の理想で

あるという。この広告からは啓蒙的・教育的メッセージを読み取ることができるというのである³⁵⁾。一歩先の理想を提示することによってもたらされるのは、それに近づくための消費である。上野は言う。「西武は『消費者とともに育った』のではない、『消費者を育てながら育った』のである」³⁶⁾。そうである。キャッチコピーにある「手を伸ばすと、そこに新しい僕たちがいた」。理想に近づくことは「手を伸ばすこと」であり、結果そこには理想の自己、「新しい僕たち」がいるのである。上野は次のようにまとめる³⁷⁾。西武のイメージ戦略は、「大衆の欲望」に先行して「価値の生産」と「学習」を行なうことであった。それは「まだ見ぬ市場」へ向けての投企と試行錯誤に満ちた過程であったと。

次の広告を見てほしい。「裸を見るな。裸になれ」（図3）。1979年から西武パルコが打ち出した「女の時代」というキャンペーンのひとつである³⁸⁾。上野はこの広告を次のように解釈する。女性のヌードが「男によって見られるもの」から女性自身にとって「見せるもの」、さらには見られることすら意識しない自己充足的な存在としての表現を獲得したと³⁹⁾。この広告は、女性の存在すら先取りしたのである。

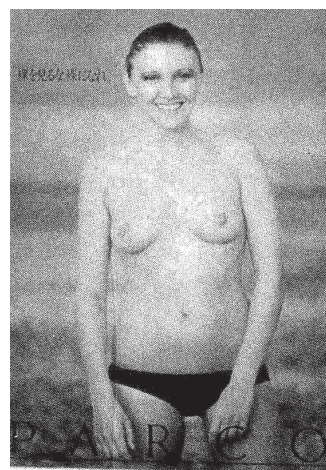


図3

3-2 マスメディア研究

ホールのマスメディア研究の問いは、シンプルである。優位的（支配的）言説は、いかに価値あるものと正当化されるのだろうか。さらに、世の中の出来事を描写・説明する責任ある組織—現代社会においてそれはマスメディアに他ならない—は、どのようにコミュニケーションの支配的システムの中で優先的な意味範囲を維持することに成功したのだろうか⁴⁰⁾。ホールが解明しようとしているのは、意味形成におけるマスメディア機関の役割、つまりマスメディアの情報に含まれる「イデオロギー」のあり方なのである。

マスメディアによる情報において、イデオロギーはあたかも現実の反映であるかのようにカモフラージュされている。ホールはこの現象を「現実効果（reality effect）」と呼ぶ。「この認識の効果は、言葉の背後にある現実を認識することではなく、いわば明証性、すなわち言説を構成する仕方の自明性や言葉が実際に依拠している基礎的前提の自明性を承認するようなものである」⁴¹⁾。

ホールはここにイデオロギーの本質を見出している。イデオロギーとは物理的権力ではなく、定義に対する承認である。そのため、イデオロギーは以下の二つの性質を持ち合わせているはずである。第一に、承認という行為に含まれる人々の選択である。イデオロギーが機能するためには、人々による選択を経ることが必要条件となる。ありのままの事実として提示される「現実効果」は、この選択を一定方向へ促すマスメディアの役割といえる。第二に、イデオロギーが私たちの選択に支えられている限り、イデオロギーの効果は「形成される構成物」である。それは特定の歴史的状況の中で力学や権力バランスによって形成されるのである。すなわち、小笠原博毅の言うように、ホールはイデオロギーを生成的なものとして再概念化したのである⁴²⁾。

ここでホールの見解をより明確にするために、1970年代以降、注目された議題設定（agenda setting）仮説を取り上げよう。マコームズ（Maxwell McCombs）らは、1968年の大統領選挙の議題設定に関する調査を実施し、マスメディアが提示す

る争点の順位と未だ誰に投票するかを決めていない有権者の争点順位を比較した。結果は、報道回数や強調された争点を有権者も争点とみなした。この結果を受け、マコームズらはマスメディアによる報道が有権者の議題設定に影響を与えていると結論づけている⁴³⁾。

ホールが見出すマスメディアによる情報の背後にあるイデオロギーとは、マコームズらのいう議題設定といえる。なぜなら、議題設定とは何を政治問題と看做すかという認識枠組みであると同時に、人々の政治選択の範囲を決定する選択枠組みに他ならないからである。ホールは言う。

「私たちはイデオロギーによる支配を複雑な関係性のシステムの属性であると考えるべきである。支配についての適切な概念を理論的に構築するのではなく、言語や言説を通して機能している規制と排除の働きそのもののイデオロギー的作用を認識すべきである」⁴⁴⁾。

「マスメディアは『合意の生産』という弁証法のプロセス—合意を映し出し、同時に作り出す—の一要素となっている」⁴⁵⁾。

4. 参加と制度

上野とホールにしたがうと、広告やマスメディア—広く「制度」と呼ぶことができる—は、人々の選択を先取りしていく。西武は一步先の理想を提示することで消費する者—つまりお客—を作っていた。この先取りされた理想をホールの文脈に引き寄せるならば、マスメディアが人々の選択を先導していくために、設定する選択枠組みと考えることができる。確かに文脈は異なるものの、両者は人々の選択を先導する「制度」を描き出しているのである。

この見解を導きの糸とするならば、2節の考察によって導き出した二つの転化—運動会に見られる「身体の強制」から「祭り」への転化、ブルマーの「女性解放のシンボル」から「女性抑圧のシン

ボル」への転化は、次のように解釈することができる。

一見、上野やホールの見解は、私たちが運動会・女性体育の事例から導出した見解と正反対のように思える。なぜなら、一方で上野やホールらは「制度」が人々の選択を先導する意味で、その権力を謳い、他方で、運動会や女子体育の事例からは、参加者が「制度」本来の意図をズラしている意味で、その権力の限界が明示されるからである。

しかしながら、私たちが看過できないのは、上野やホールの議論が有する前提である。より具体的には、彼（女）らが描いているのは、制度による人々の一方的強制ではない、むしろ逆に現代における制度は、人々の参加を前提条件として成立しており、制度はその参加—多くの場合、選択—を織り込む形で作用しているのである。上野やホールが描いたのは、制度と人々の参加が利害関係の下で複雑に絡み合った政治的関係ということができる。このように考えるならば、運動会と女子体育の事例において強調すべきは、人々の参加が制度との関係を条件にもたらされたことであろう。そして、その参加によってもたらされる制度の変化であろう。

吉見俊哉は、運動会の事例を検討した結果を次のようにまとめている。「運動会とは、明治国家がこの列島の人々の身体と祭りの記憶を再編成していこうとしたときに、その接合面に現れた、一つの媒介的とも、調停的ともいえる現象」である⁴⁶⁾。国家の戦略と人々のパフォーマンスが、対峙するのではなく、細部に矛盾を抱えながらも、重層的に結びつき、調整されていったというわけである⁴⁷⁾。

このことは女子体育の事例にもいえる。元々「女性解放のシンボル」だったブルマーが「女性抑圧のシンボル」へと転化したことは、制度との関係のもとで、人々のパフォーマンスが調停されていった結果である。具体的には、学校教育の中で、少女たちのみが、体育の時間に限定してブルマーを着用した。この反復の中で、少女たちは、自らが女性であるという女性としてのアイデンティ

ティーや学校教育を受ける児童生徒としての集合意識などを醸成していったにちがいない。

児童生徒たちが、運動会で走り、綱を引くこと、体育の授業をブルマーを着用し受けること—いわゆる参加—は、調停がなされるための条件であったのである。

おわりに

本稿が明らかにしたのは、社会関係資本への人々の参加には制度が介入していることである。クラブ活動などの社会関係資本は、単に体力を上昇させる運動の機会を提供するだけでもない。さらに、人的ネットワークを形成し、地域の連携を促進するだけでもなかりう。私たちが目を向けるべきは、むしろクラブ活動も含めた体育をめぐる社会関係資本それ自体に宿る権力である。

権力は、運動会、普段の体操着にまで作用している。この権力は、マスメディアが枠組みを先取りし、人々の選択を規定したのと同様に、体育を行なう舞台を設定する点で働いている。制度の枠で行なっているにもかかわらず、参加者本人は自らの意思にしたがい、能動的に行為していると考えている。制度を伴う権力はこのように作用するのである。とりわけ、わが国においては、明治以降の近代化と人々の参加の関係は不可分であるといえる。クラブ活動への参加を捉える視点として、制度的視点が不可欠であることを明示した点に本稿の意義を見出すことができるだろう。この視点をもつことで、私たちは、具体的には、以下のような考えを回避することが可能となる。ここでは二つの代表的見解を挙げておこう。

第一に、現在は体力が低下している。そのため、学校教育における運動会などスポーツ系の制度を整備・実施し、人的ネットワークを形成することが大切である。そして、それぞれの地域が連携をもらたらずクラブ活動のような社会関係資本を形成することが重要である。このような見解である。

確かに、社会関係資本の形成には制度が不可欠である。そして、おそらくクラブ活動などの充実

は、児童たちの体力上昇に寄与するだろう。しかしながら、この瞬間、私たちは従来のように、体力を「上昇／低下」という二分法で捉えてしまっている。むしろ問うべきは、その手前である。児童が社会関係資本へ参加するのに、制度はいかに関与しているのか。

第二に、体力は人それぞれの特性に応じたものであるから、必要なのは個別性であるという見解である。このような見解は確かに体力問題に対して複眼的にアプローチしている点で評価できる。しかしながら、体力問題を個々人の資質や能力に回収してしまうと、体育のもつ集合的側面を看過してしまう。体育は個々人に還元できない社会的実践と看做す視点が不可欠なのである。その意味で社会関係資本を制度的視点から眺めることは必要なのである。

本稿では、島嶼部の児童が参加する社会関係資本—クラブ活動—へいかなる制度が関与しているのかを調査することができなかった。この点に関しては他日に期すこととしたい。

-
- 1) 伊藤数馬他, 2009, 体力問題に関する考察—学力問題と小児看護の議論から—, 社会情報学研究 15, 14
 - 2) 松尾晋典他, 2009, 児童の生活状況からみた体力と運動意識の関連—島嶼部の小学生に着目して—, 社会情報学研究 15, 29-30
 - 3) R. パットナム (河田潤一訳), 2001, 哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造—, NTT 出版, 206-207
 - 4) P. Bourdieu, 1986, The Forms of Capital, J. Richardson (ed), Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education, Greenwood Press, 248
 - 5) 坂田正三, 2001, 社会関係資本と開発—議論の系譜—, 佐藤寛編『援助と社会関係資本—ソーシャルキャピタル論の可能性—』アジア経済研究所, 12
 - 6) J.S. Coleman, 1988, Social Capital in the Creation

- of Human Capital, American Journal of Sociology Vol.94, Supplement, 98
- 7) パットナム, 哲学する民主主義, 216/ R. パットナム (柴内康文訳), 2006, 孤独なボーリング—米国コミュニティの崩壊と再生—, 柏書房, 19-21
- 8) J. Fox, 1996, How does Civil Society Thicken?: The Political Construction of Social Capital in Rural Mexico, World Development, Vol.24, No6, 1089-1103/ P.A Hall, 2002, The Role of Government and Distribution of Social Capital, R. Putnam (ed), Democracies in Flux: The Evolution of Social Capital in Contemporary Society, Oxford University Press, 21-58/ 平塚真樹, 2006, 移行システム分解過程における能力観の転換と社会関係資本—「質の高い教育」の平等な保障をどう構想するか?—, 教育学研究, 第 73 巻, 第 4 号, 69-80
- 9) Th. スコッチポル (河田潤一訳), 2007, 失われた民主主義—メンバーシップからマネージメントへ—, 慶應義塾大学出版会, 150
- 10) 同上, 216
- 11) 吉見俊哉, 1999, ネーションの儀礼としての運動会, 吉見俊哉編, 運動会と日本近代, 青弓社, 11
- 12) 吉見俊哉, ネーションの儀礼としての運動会, 16-17
- 13) 李孝徳は, 明治期に身体の強制が体操によって行なわれたこと、さらにその強制が図や表などの表象を通してなされたことを明らかにしている (李孝徳, 1996, 表象空間の近代—明治「日本」のメディア編制—, 新曜社, 175-176)。
- 14) 森有礼, 1972, 埼玉県尋常師範学校における演説, 大久保利謙編, 森有礼 (近代日本教育資料叢書 人物篇 1), 宣文堂書店, 481-486
- 15) 園田英弘, 1993, 西洋化の構造, 思文閣出版, 225-232
- 16) 森有礼, 1972, 京都府尋常中学校において郡区長・府会常置委員会及び教員に対する演説, 大久保利謙編, 森有礼 (近代日本教育資料叢書 人物篇 1), 宣文堂書店, 589-590
- 17) 平田宗史他, 1986, わが国における運動会の歴史的考察 (1), 福岡教育大学紀要 36 号第 4 分冊,

- 119-127
- 18) 吉見俊哉, ネーションの儀礼としての運動会, 34
- 19) 同上, 32
- 20) 宇野沢太郎, 1906, 運動会改良に就て, 千葉教育雑誌, 168号, 30-31
- 21) 山本信良他, 1986, 大正・昭和教育の天皇制イデオロギー, 新泉社, 285-286
- 22) 吉見俊哉, ネーションの儀礼としての運動会, 39-40
- 23) 同上, 45
- 24) 掛水通子, 2005, ブルマーの戦後史, 高橋一郎他, ブルマーの社会史—女子体育へのまなざし—, 青弓社, 170
- 25) 同上
- 26) 後藤洋子, 1999, アメリア・ブルマーに見られる服飾観, 服飾美学 28, 87
- 27) 佐々井啓, 1989, 十九世紀後半の女性の脚衣—ブルマーから自転車服へ—, 服飾美学 18, 115-134
- 28) 谷口雅子, 2005, ブルマーと近代化, 高橋一郎他, ブルマーの社会史—女子体育へのまなざし—, 青弓社, 72
- 29) 掛水通子, ブルマーの戦後史, 178-181
- 30) 同上, 179
- 31) 同上, 181
- 32) 谷口雅子, ブルマーと近代化, 56-57
- 33) 上野千鶴子, 1999, 「女の時代」とイメージの資本主義—ひとつのケース・スタディー—, 花田達朗他, カルチュラル・スタディーズとの対話, 新曜社, 171
- 34) 同上, 175-176
- 35) 同上, 177
- 36) 同上, 177
- 37) 同上, 183
- 38) 同上, 179
- 39) 同上, 178-179
- 40) S.Hall, 1982, The Rediscovery of “ideology”: Return of the Repressed in Media Studies, M.Gurevitch et. al., eds. Culture, Society, the Media, Methuen, 67-68
- 41) Ibid., 75
- 42) 小笠原博毅, 1997, 文化と文化を研究することの政治学—ステュアート・ホルの問題設定—, 思想 873号, 岩波書店, 48
- 43) M.マコームズ他(大石裕訳)『ニュース・メディアと世論』関西大学出版部, 21-22
- 44) Hall, The Rediscovery of “ideology”, 85
- 45) Ibid., 87
- 46) 吉見俊哉, ネーションの儀礼としての運動会, 48
- 47) 同上